

第3章

農の本質を抱きしめていく有機農業

足元に広がる農学のフロンティア

宇根 豊

1 本質を問わない習慣

30歳代初めの頃、「自然」が Nature の翻訳語だと知ったときの衝撃は忘れられない(柳父 1982))。「自然」という言葉は、明治時代に西洋から輸入しなければならなかったのだ。ところが、いまでは「ええっ、そんな！こんなに自然が豊かな国に“自然”という日本語がなかったはずがない」と、不思議に思う日本人は、もういなくなった。農業の本質が見えなくなった最大の理由が、ここにある。

第二次世界大戦前までの百姓の日記には、「自然」という言葉はほとんど出てこない。百姓が「自然」を使い始めるのは、戦後になってからだ。それまでは人間も含む「天地」という日本語が使われていた。簡単に言うと、自然を内から見れば「天地」と見え、外から見れば「自然」と見える。なお、近年私が「百姓学」の手法として常用する「内からのまなざし」の起源は、ここにある。

それまでの日本語の「自然」は名詞ではなく、おのずからなる様子(自然な、自然に、自然と)を表す副詞的なものだった(もっとも「自然」という漢字も輸入語で、よく使われるようになったのは、平安末期だ)。自然(Nature)の「神と人間と人工物以外を指す」という原意に忠実なら、「農業は自然破壊の最たるものである」というのは、正しい。しかし、人為のなせる極致とも言える棚田の風景を見ても自然な感じがするのは、自然(Nature)は自然な(natural)ものだと、私たちが西洋語と日本語を重ねてしまっているからだ。

したがって「人間も自然の一員である」のは、Nature の原意に忠実なら誤用もいいところだが、賛成する日本人が9割を越えている(宇根 2019)。人間が自然の一員なら、田んぼや畑や農は当然“自然”である。あわてて断っておくが、この場合の“自然”は、両方(西洋語と日本語)の意味を持つ「合成語」だと言えよう。

この曖昧さ、融通無碍^なぶりが、農と自然の関係を問い詰めることを妨げてきた。赤とんぼも蛙も、田んぼで自然に生まれている、と日本人は思っている。「そんなわけない。百姓が育てているんだ」と言うと、「ええっ、何言ってるの?」という反応が何よりの証拠になる。

ただ、もう一つの衝撃を語っておかないと、この論考は始まらない。Natureの翻訳語ではない元からの「自然」という日本語の由来を、私は最近までまったく知らなかった。溝口(2011)によると、「自然」という中国語は、戦国時代末期(紀元前250年頃)に道家によって、つくられた思想用語だそうだ。その意味は「全体世界の条理性」「あるべき正しい在り方」なんだと言う。うーん、と考え込む。

そうであるなら、私は有名な『老子』の「人は地に法^{のつと}り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」の意味を、間違っ^てて「あるがまま」と理解していた。相良(1995)は、そこをうまく整理している。

「日本語の「おのずから」は、本性・本質・秩序の意を含まず、「おのずからなる」という生成の意味を中核とする。中国の「自然」は生成の意味も含むが、むしろその中核は、自ら然る本来的な正しいあり方にあった」

つまり、老子はおのずからなるあり方自体を「正しい」というところに力点を置いて、主張していたわけだ。

ところが、私たち日本人は、自然だけでなく農の本質が「何であるか」を問うことがない。立川(1995)はこのことをわかりやすい比喩で論じている。

「われわれ日本人は、道端に咲く一輪一輪のタンポポを見るとき、その一つの花に宇宙を見てしまう。その花が、世界の構造の中でどこに位置するか、などとは問わないのである。梅の花の香りがただよってきた時に、香りと花との関係はどのようなものであるかなどという問題に何十年、何百年をかけてきた歴史は、幸か不幸かわれわれ日本人の中にはない。しかしインド哲学はその問題に2000年の時をかけてきた」

そして、農学に限らず、有機農業をやっている百姓もまた「農の本質」を問わないまま、ここまできたのではないかと、私は感じる。農に関する言説があまりに現世利益に偏りすぎている理由の一つが、ここにある。

この論考は現実世界(意識世界・外からのまなざし)と、精神世界(無意識の世界・内からのまなざし)を行ったり来たりしながら、「農とはいったい何なのか」

(つまり「農の本質」)を考え、表現することになる。たぶん、これまで誰もやらなかった「方法」を駆使しながら。

2 有機農業とは「農の本質」を深く抱きしめて生きていくこと

ところで「農の本質」って何だろうか。「農の本質は食料生産と決まっているだろう」というのは、本質を考えようとする日本人の典型だ。それなら、その食料がどこで穫れたのかも知らずに食べても農の本質は守られることになる。これではグローバル化には反対できない。また、東京電力福島第一原子力発電所の事故で作付けが禁止された田んぼで、燕や蛙のために代掻きをしたすごい百姓がいたが、それは農ではないことになる。

それでは、「農の本質」を失った農業もあるのだろうか。それは「農業」と言えるのだろうか。「言えない」と考えた少数の人たちが、自分たちの農を指して「有機農業」と名づけたのではなかったのか。

「これからは、AIやICTを農業もどんどん導入し、技術革新を進めて、人間は田畑に入ることなく、ロボットが作業をする時代になります」と、JA全中の前会長が語っていた。これも農と言えるだろうか。「言えない」と答える人が多ければ、有機農業思想の出番はない。しかし、圧倒的多数の日本人が、「それも農業でしょう」と答えるのだ。

「農の本質」を考えないのだから、これは当然の成り行きだ。有機農業などは異端であり続けるだろう。そこで、あるとき私は気づいたのだ。本質を探さない日本人の中であって、かつて「農の本質」を本気で探した百姓たちがいたことに。当然ながら彼らは異端で、少数派に甘んじた。もうほとんどの人は知らないだろうが、大正時代から昭和初期の「農本主義者」たちである。

誤解を招かないように、最初に断っておく。農本主義のイメージとして言及される「農は国の本」というスローガンは、農の本質とはまったく無縁だ。農本主義を矮小化させ、墮落させたプロパガンダとして最低のものだ。

彼ら農本主義者はなぜ、日本人なのに「農の本質」なんてものを考えたのだろうか。その理由は重要だが、単純だ。近代になって「農の本質」が失われ始めたからだ。私たちにとっては、「農の本質」とは失われたいと思えないものかもしれない。

彼らのなかでも代表格の橘孝三郎がたどり着いた結論を要約してみる(詳しくは宇根(2015、2016)をぜひとも読んでほしい)。

- ①農を本として天地のめぐみを受けとる以外に、人間は生きるすべがない。
 - ②農は天地自然を相手にしている。その天地自然とは、経済価値では測れない。
 - ③天地自然に抱かれる百姓仕事こそが、最も人間らしい生き方だ、しかも、百姓仕事の最中には、経済など眼中にない。
 - ④したがって、農は資本主義には合わない。
- これくらいにしておこう。後で詳しく説明する。

3 なぜ、農薬・化学肥料・遺伝子組み換え技術を拒否するのか？

農薬・化学肥料・遺伝子組み換え技術を拒否する理由として、生産物の「安全性」を確保するためだというのは、有機農業の本質ではない。安全性が確認されたら、認めるのか？「農の本質」を傷つけるからだ、というのが私の理由だ。そう言うのなら、農薬・化学肥料・遺伝子組み換え技術以外にも傷つけるものがあるだろう、という指摘は、そのとおりだ。それは何だろうか、と考えるべきだ。後で、AIとICT技術を装備したスマート農業を例示する。

同時に、傷つけられるものは何だろうか、とも考えないといけない。それは、①天地自然(生きものや田畑も含む)と百姓の関係、②天地のめぐみ自体、③百姓仕事の経験知、そして精神性、であろう。

そこで、ケーススタディをやってみよう。スマート農業のロボット(機械・装置・施設)が、無農薬・無化学肥料・遺伝子組み換え技術なしの農業をやる場合を想像してほしい。植物工場の権威である古在豊樹さん(元・千葉大学学長)は、「植物工場でも作物の出来は、実務者の経験に左右される」と正直に吐露している。百姓仕事や農業技術はマニュアル化できない世界によって支えられていることに、気づいているのだ。

そもそも、まったく同じ条件下でも作物の育ちは異なる。作物一つひとつに個性がある。いや、もともとまったく同じ条件など、自然界にも植物工場にもあるはずがない。たとえば百姓がよく通る通路側とそうでない側では、生育が違う。農林水産省の推進資料「ICT農業現状とこれから(AI農業を中心に)」

(2015年)には、ICTの課題として「熟練農家の高い生産技術(暗黙知、経験則)をどう引き継ぐか」が挙げられていた。古在さんと同じ壁にぶつかっている。

しかし、なぜ、いまごろになって初めて、こういうことに気づくのだろうか。結論を言ってしまうと、農業技術(上部技術・テクニック・マニュアル化できる工程)は広大な「土台技術」(経験知・無意識の暗黙知・準備・ふりかえり・情念・情愛・生きがいなど)によって支えられているからだ。

さて、田畑から人間を引き上げさせるのが農業の進歩だと考えるなら、当然ロボットにも「土台技術」を身につけさせるべきだ。そうしないとうまくいかないし、何よりもロボットに失礼だろう。要するに、百姓の生きる喜びも悲しみもロボットに譲り渡そうとするなら、ロボットに生きがいを持たせなければ、百姓の生きる喜びは誰が(何が)継承するのだろうか。この百姓の(そしてロボットの)生きる喜びと悲しみこそが、「農の本質」の表情だと言える。

科学は(脳科学も)、人間の脳内の物質的な反応からどうして非物質的な精神活動(心)が生まれるかを解明しようとしている。もしうまくいけば、農薬・化学肥料・遺伝子組み換え技術よりもはるかに危険なものになることを、百姓は、いや人類は気づいているだろうか。

将来、有機農業とは「……とAI技術を採用しない農業である」と定義するような社会にならなければいけないのだが。ここで、これからの有機農業が採用すべきでない技術が明らかになる。スマート農業の技術は「農の本質」を破壊する。それは、農薬や化学肥料や遺伝子組み換え技術の比ではない。

さてさて、現代の農業技術の展開は、①AI化やICT化の方向、②経済効率追求の方向、③環境保全の方向ばかりを向いているようだが、もう一つ別の方向が見失われているのではないかと、言いたい。それこそ、④「農の本質」を守り抜く方向ではないだろうか。

4 仕事を思想化すること

「農の本質」とは、農本主義者が見事に見抜いたように、百姓(人間)と天地自然との関係の中に居座っているもので、姿としてはさまざまに現れるが、何よりも百姓仕事に現れることは間違いない(念のために言っておくが、農業技術の中には現れない)。そこで、百姓仕事のことを考えてみよう。まず現代の風

潮を問わなければならぬのは、「生産物で百姓仕事か語れるのか」だ。

「いい物は、いい仕事から生まれる」とは言うが、「いい物」は科学的に精緻に分析され、表現され続けている。一方の「いい仕事」は、どれほど深く分析されてきたらうか。

こういって、すぐに反論される。「同じ物をつくるなら、労働時間が短いほうが、コストが低いほうがいい生産で、いい仕事でしょう」と。この「同じ物」は、たぶん同じ品質＝同じ経済価値だろう。ここが気に入らないが、せいぜい「同じ物」という考え方は、たかだかこの30～40年前からの習慣にすぎない。そもそも、そういう発想が仕事を墮落させたことは明らかだ。この「物」が「生きもの」だということを忘れている。

いずれにしても、仕事を「外から」見ている。生身の生きているという実感から、切れてしまっている。たとえば、私が草取りをしているのを見ていたある人が「百姓仕事は単純作業の連続ですね」とコメントした。やれやれと思いつつも、外から見るとそう見えるんだ、と気づいた。それでは、内から見たらどう見えるだろうか。拙著『農本主義のすすめ』に、次のように書いたので、ひんしよく 撃感をかうかと思ったら、意外に賛同する百姓が多いので驚いた。

「誰も言わないから私が代弁するのですが、「草とり」ほど、楽しい仕事はありません。百姓が生きものの中でも、草の名前を一番多く知っているのはその証拠になるでしょう。

草取りするから、草の名前を呼び、草の様子から天地自然を読み取り、田畑の性質を感じとり、生きものの生死の感覚を学び、何よりも仕事に没頭し、天地自然と一体になる境地を身につけることができます。外から見ると「単純作業」に見えるかもしれませんが、内から見ると、草と「今年も生えてきたね」「もう花を着けたのかい」「よく根がはってるね」「葉が虫に食われているよ」などと話をしながら草取りしているのですから、単純作業と見る見方とはまったく別の世界を感じているのです」

仮に同じ百姓の仕事で、「同じもの」が「できた(つくった、とは言ってはいけない)」としても、楽しく仕事したときと、苦勞したときと、悲しかったときでは、できた「生きもの」は違って現れるものだ。しかし、百姓にはそうでも、消費者にはそんなことは分からないだろう、とすぐに反論される。

だからこそ、その断絶を埋めるために、「産直」や「地産地消」や「有機農

業」が出てきたのではないか。生産過程は、生産結果(生産物)よりもはるかに重要なんだ。

「つくった」と言うから、生産物に目が行く。工業製品を思い浮かべるといい。どこの工場で、どういう人間が、どういう気持ちで作ったかが問われることは、なくなってしまった。生産物だけが価値なのだから、困ったことだ。農業も産業化すれば、そうなる。それは近代化社会の帰結であり、農業もその流れに乗るしかない、という主張は、実は昭和初期の農本主義者と進歩的な農学者の論争の繰り返しでしかない。同じ論議が、なんと80年間も続いていることに驚いてほしい。

農学者・東畑精一は言っていた。

「社会が変化しないなら、百姓が同じ仕事をくり返しておれば済む。しかしこれからは、農業も資本主義の発達に乗り遅れないようにしないと、時代遅れになる」(東畑 1931)

対する農本主義者・橘孝三郎は、こう反論していた。

「資本主義に合わせるといことは、天地自然の中に経済価値を見つけることではないか。それでは農の本質が破壊される」(橘 1932)

時代は、東畑に軍配を上げようとしているかのように見える。だが、そうではない。

かつての農本主義を私が再評価しようとしているのは、彼らが農業において発見した「反近代」の語り方が、現代でもとても新鮮に感じるからだ。その中心は、「百姓仕事は、他産業の労働とは本質的に異なる」というものだ。そこで、新しい時代の農本主義者である私は、なぜ異なるかを次のように語り直そうとしている。

農の価値を生み出す主体は、人間ではなく、天地自然なんだ。人間は受け身で受け取るのが本質だ。だから、感謝・お礼はまず天地にしなければならない。新しい技術の採用で、100kg増収したとしよう。その100kgもまた天地自然によってもたらされたと考えるべきで、技術によって得られたと判断するのは、後回しにしたほうが上等である。

百姓仕事は、自己を忘れて仕事に没頭できる。それは、天地自然に抱かれて、一体化するからだ。なぜなら、天地自然、生きとし生けるものを相手として、手入れに励み、ついには「相手(有情)本位」になるからだ。そこから、人間中

心ではない情愛と、天地自然観が生まれて育つからだ。

ここで、とても大切なことに気づく。つまり、「反近代」の根拠地は、近代化しても近代化しても、近代化しきれない世界にあるということだ。それは、「農の本質」が近代化(資本主義化)できないことを証明している。農がこれからの未来に残るとするなら、それは近代化できない世界を抱きしめて、手放さない農だけが残るということになる。これを証明できる農学者が現れてほしい。

5 仕事の語り方の変化

仕事自体よりも生産物を雄弁に語るのが、資本主義社会の特徴だが、「仕事の語り方」も変化してきたことに気づいているだろうか。たとえば「稲のとりいれ」を例にとってみよう。

- ①「やっと終わった。これで楽になる」(これは「労働」の語り方)
- ②「米はよくできている」(これは「生産」の語り方)
- ③「これからは、田んぼに通えなくなるな」(これは「仕事」の語り方)
- ④「早くまた春が来て、田植えになればいい」(これは「相手」の語り方)

仕事よりも労働を語るようになったのは、労働を評価する普遍的な尺度(労働時間、生産性など)が発達してきたからである。仕事自体を語ることは、個人的な思いの発露にすぎなくなってきた。仕事の対象の語り方も、作物や天地自然の有情たちを語るのではなく、生産物の語りが隆盛になり、精緻になった。これもまた、農学がさまざまな尺度を開発してきたからである。

もう一つ「田まわり」という仕事を例にとってみよう。

- ①【労働】田まわりの時間が1時間かかった。
- ②【生産】稲の生育は平年並みだ。
- ③【仕事】田まわりすると気持ちが落ち着く。
- ④【相手】お玉杓子が今年もいっぱい生まれてきた。

③と④の語りは、しだいに衰えてきてしまった。その最大の理由は、「仕事」を語るよりも「技術」を語るほうが、時代の要請だからである。残念ながら、科学と農学・農政が百姓に与えた影響も計り知れない。

6 技術に経験知と暗黙知を組み込めるか

そこで、「技術」に経験知や暗黙知を組み込むことができるかどうかを検討してみる。ここで「思考実験」をやってみよう。

「従来の稲作技術には、蛙を育てる技術は含まれていないのに、お玉杓子が田んぼでは育ち、蛙の個体数のうち95%以上は田んぼで生まれているのは、なぜだろうか」

人口に膾炙している答えは、「たまたま蛙が、田んぼの環境に適応している」「田んぼには蛙を育てる多面的機能がある」というものだ。要するに、そういう「技術」は存在しないことを認めるわけだ。これを論破するのは簡単だ。田植え後20日目からの「早めの間断灌水」という水管理技術を行使してみよう。お玉杓子は全滅する。これは当然である。お玉杓子の生など、この技術の目的ではないからだ。

そこで、「技術は、目的としていないものを生産しない」という定義が無効になる。「技術は目的としないもの(コト)にまで、影響を与える」からだ。ただ、その目的は眼中にないから、無視してしまうだけのことだ。それに気づいてしまうと、どうなるか。

田んぼに水を溜める。それを見回る技術(水管理技術)の目的は、稲の生育を促進し、雑草の発生を抑えることにあるのだが、目的以外のお玉杓子を育てるといふコトまで生み出してしまう。このコトにどうして気づくだろうか。

水管理の技術が失敗して、うっかり水が干上がり、当然ながら、お玉杓子は全滅してしまった。こういうときに(年配の)百姓のほとんどが、不思議なことに「悪かった。ごめんよ」と詫げるのだ(図I-3-1、若い百姓はそうでもな

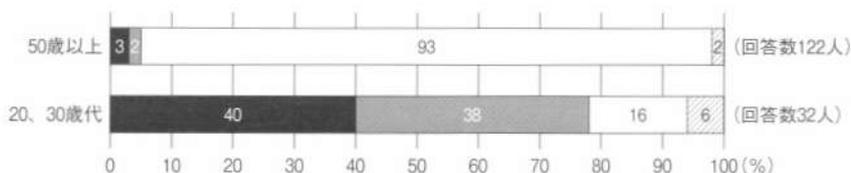


図 I-3-1 お玉杓子が死んだことに対する百姓の感想

(注1) ■ 仕方ない。分解されて、良質の有機質肥料になればいい。■ 惜しい。蛙になるまで育てば、天敵として役立つのに。□ ごめん。水を切らして、悪かった。□ 無回答。

(注2) 40歳代は回答者にいない。

(注3) 福岡県で2017年に調査。

いが)。ということは、お玉杓子のためにも「無意識に」に水を溜めていたのである。そう、気づいてしまったのだ。

目的としていなかったのに、なぜ百姓は、お玉杓子に詫げるのだろうか。ここからが、私の発見である。

百姓は、田まわりの仕事の一部として、無意識にお玉杓子を見ていた。そして、無意識のうちにお玉杓子への情愛を育てていたのである。これが経験知の最も深い層だ。その証拠に、お玉杓子が全滅した田んぼは、足を踏み入れると「寂しい」と感じる。いつも足下で泳いでいたお玉杓子がないからである。子どもを失ったように「悲しい」。

そこで「無意識に生きものを育てる技術」もあるのだ、と言ってみたい気がする。しかし、そんな馬鹿な技術があるはずがない、というのがこれまでの常識となっている。

ここで、仕事と技術の違いが明白になった、と言うべきだ。やはり、技術を語るのではなく、仕事を語らなければ、生産の全容は表現できないし、伝えることはできない。技術は、仕事の一部しか技術化できない。

たしかに、「お玉杓子を育てる技術」だって、形成できないことはないだろう。しかし、その技術は田んぼに水を溜め、切らさないようにする仕事によって育まれた情愛を、引き継げるだろうか。「技術は結果としてお玉杓子を守ればいいのだ。お玉杓子を好きか嫌いかは関係ない」と言い切れるだろうか。

実は、このように科学知を包み込み、場合によっては対峙もする百姓の経験知の実相は、つかまれているとは言えない。それがどこまで無意識に根を降ろしているか、どのように気づき、表現すればいいのかは、まだまだ解明されてはいないのだ。

7 有情本位の世界

主に戦後に活躍した農本主義者・松田喜一は、百姓仕事の最大の楽しみは、自己を忘れることだと教えている。こう力説していた(松田 1951)。

「百姓は作物から心を奪われなければならない。そうなると、一日に何回でも、回り道をしてでも会いたくなる。これは、己よりも相手(有情)本位になるからである」

百姓仕事は生きもの(有情)を相手にする。機械移植よりも「手植え」のほうが作物がよくできるように感じるのは、機械の精度が低いのではなく、手塩にかけて育てた実感が身体に宿るからであり、情愛が濃くなるからだ。有機農業や前近代の農業が近代化農業よりも優れているのは、まさにこの点に尽きる。

この自己よりも相手(有情)本位になる、人間よりも生きもの(有情)本位になることは、作物だけでなく「雑草」「害虫」との間でも生じる。なぜなら、知らず知らずに、つまり無意識のうちに、相手の生きものとの垣根が低くなり、やがてなくなるからである。近代の特徴が人間中心主義だとするなら、これは前近代の習慣であり、反近代の生き方だと言ってもいい。

要するに、生きもの同士という感覚が無意識に生じてくる。その蓄積が「情愛」になる。この「情愛」こそが、身体や思考を無意識にコントロールしているのかもしれない。刈払機で畦草刈りをしていると、急に蛙が跳びはねる。そのたびに、私は反射的に刈払機の進行を止めて立ち止まる。この行為が数mおきに続く。情愛にコントロールされているからだ。このときに自分の情愛を意識することにもなる(この躊躇を無駄だと決めつける近代化精神とは、しっかりと対峙しなくてはならない)。

この相手(有情)本位になるということは、「農の本質」ではないかと私は思う。田んぼの畦をただ歩くという行為ですら、相手(有情)本位になる。毎日一度だけ通る畦道は、私の足が踏みしめるだけで、畦の中央に背丈の低い草だけが並ぶ一筋の道ができる。内側には湿った土が好きな草が、外側には乾いた環境が好きな草が、そして真ん中には踏まれるのが好きな草が整然と並ぶ。

このことを百姓は無意識に見ている。だから、私が話すとみんなが「そう言われりゃ、そうだな」と同意する。草たちは喜んでいるのだが、百姓はこのように「相手(有情)本位」になっていることすら意識しないものだ。

つまり生きものから見るなら、百姓仕事が意識的であろうが無意識であろうが、どうでもいいことで、その仕事がちんと続けられることが大切だ。いやむしろ、生きものにとっては、かつてのように無意識にやられているほうが安定した仕事であって、安堵していたのかもしれない。なぜなら意識的な技術は、時代の精神に合わない世界を意識的に排除していくからだ。このままでは、現代社会では積極的な価値を持たない無意識の仕事は衰弱するばかりである。

有情へのまなざしと情愛は、無意識に家族や共同体の中で引き継がれる。そ

それはそうだろう。私たちはありふれた生きものの名前を、どうして誰から教わったのか、ほとんど思い出せない。なぜなら、在所の共同体の天地自然観は、生きものの名前と生きものへのまなごしを伝えることによって、無意識に継承されていくからである。したがって、まなごしや情愛はことあるごとに再生・再現されることが共同体を豊かにする。その手段として、まなごしは体験や仕事によって意識化されることが望ましい。

それでは、無意識の仕事のほうからの対抗は可能だろうか。「そりゃあ、無意識だから、無理だろう」と思われるかもしれないが、そうではない。植物工場だって、土台技術を形成しようとしている。農林水産省だって、ICTに「暗黙知」を取り入れようとしている。そんなの無理だと、決めつけても仕方がない。むしろ有機農業こそが、無意識の世界の豊穡さを表現しようではないか。有機農業学は、そのために一肌脱ぐ気持ちを持ってほしい。

8 農の精神性

草取りが終わると「やったー、終わった。これで楽になる」という感慨よりも、「稲が喜んでいる」と感じるほうが、上等だ。なぜか。

「己を愛するは善からぬことの第一なり。決して己を愛せぬものなり」(西郷隆盛)

こういう感覚は、実は百姓の価値観・感覚の影響である。大雨のときには、夜中に起き、雨合羽を着て、田んぼに急ぐ。妻が言う。

「流されても知らんよ」

今年も何人の爺ちゃんが、田まわりのときに流されて亡くなったことか。稲が、田んぼが呼んでいるのだから、止めようがない。

「稲の声が聞こえるようになれ」というのも、相手(有情)本位になれと教えていたのだ。これらの感覚(精神性)は、古くさくて時代遅れではない。その証拠に、まだ百姓の中に、ずいぶん薄れたが残っていて、たまに意識に浮上してくるではないか。これを「反近代」(近代の超克、これも古いな)の新しい思想に仕立てるのが、私の魂胆である。繰り返しになるが、仕事が楽しいときに、労働時間やコストや所得などの「近代化尺度」なんて、すっかり忘れていないか。なのになぜ、忘れていた次元の豊かさを掘り下げて表現して、新しい

尺度を考案しないのか。

隣の婆ちゃんが、「今年もまた草が伸びてくる季節になりましたなあ」と挨拶をするときに、私が「草取りが大変でしょう」と応じると、「なにが(そんなことがあるものか)、これも楽しみのうち」と答えてくれる。ここには何の価値表現もない。ふだんの当たり前の精神性が吐露されているだけのことだ。単なる個人的な感慨であり、学や政策の対象にもならない。

だが、そう言い切ってはならぬ。婆ちゃんは、また草取りができることを喜んでいる。草と会えることを喜んでいる。草取りは、草を殺すことである。それなのに、婆ちゃんはこの「殺生」を悩まなくていい精神性を獲得しているのだ。こういう世界を有機農業の「除草技術」も具備してほしい。

考えてもみよ。百姓ほど、生きものを殺す仕事はない。田畑を耕せば草を殺し、水をかければ虫を殺し、間引けば苗を殺し、収穫すれば作物を殺す。これほどの「殺生」を繰り返しておきながら、そのことを悩まずにすんでいるのは、なぜだ。「また、会える」からだ。

持続や循環や再生やエコや共生という言葉には、こういう精神性が欠けている。批判しているのではない。百姓の精神性を本格的に表現しようと提案しているのだ。有機農業もそうあってほしい。

もう一つの思想化も語っておかねばならない。「相手(有情)本位」という精神性の宇宙への広がりのことだ。なぜなら「相手」の総体が天地だからである。その天地が、実は自分の中にあるということだ。

科学的に捉えるなら、天地自然は人間の外側に、対象化できるものや現象として存在する。それを意識的に捉えようとするのが、一般的だ。しかし、見慣れた在所の天地自然は、眺めていてもすぐに忘れていき、すぐに無意識の世界つまり自身の内の深部に取り込まれてしまう。

百姓仕事に没頭して、我をも忘れてしまうのは、自分の中の無意識の世界で実現されているからである。したがって、意識された世界に戻ったときに、我に帰るのだ。天地に没入していたということは、自分と天地が一体化して、自分の中に天地が入ってしまっていることでもある。

このように百姓が感じてきた天地自然のもろもろは、無意識の世界に蓄積されているからこそ、ふと道端の小さな花にも目がとまる。そして、ほとんどの場合は意識することなく、すぐに忘れていくが、この忘れていく膨大な無意識

の世界を背負って、私たちは生きてきた。この無意識の広大な、豊穡な世界こそが、百姓にとっての「天地」だった、と気づこう。

私たちは、田畑で一服するときに、自分が抱え込んできた内なる天地を意識に浮上させて、風景や有情として見るのだ。意識的には見ていなくても、いつも無意識に見ている目の前の風景や生きものは、私たちの大いなる一部だ。この農の豊穡さを失ってはならない。

これまで語ってきたことで、農とは、資本主義社会(近代化社会)の意識的な価値観(自己や国家の欲望実現)とはもともと相容れない営みだということを、感じてもらえただろうか。どんなに資本主義社会に合わせて日々を過ごしていても、ふと道端の小さな花に気づくときに、その花に気づかせてくれる背後には無意識の農の世界があることを、忘れないようにして生きていきたい。

9 農学のフロンティア

農学のフロンティアは、農をもっともっと近代化・資本主義化・人工化することにあるのではなく、振り返ってごらん、ほらあなたの歩いてきた道端には見向きもされなかった野の花がきれいに咲いているでしょう、そのことに気づくまなざしの中にあるんじゃないの、と言いたかったのだ。つまり、農学が他の諸学とはどこが違うかということ、これでもかこれでもかと、語ってきた。「本質」や「精神性」という聞き慣れない切り口で、私の百姓仕事の合間に思索してきたことを披露してきた。

ぜひとも、これからの農学者と百姓には、「農の本質」を「学」で表現してほしい。「有情本位」の意味を本格的に掘り下げてほしい。近代が再形成できなかった天地有情の自然観を、言葉にして見せてほしい。従来の農学では無理だ、ということはいく知っている。しかし、ここに農学のもう一つのフロンティアがあることだけは、たしかに言えることなんだ。

<土台とした拙著>

農本主義者の著作はほとんど復刻されていないので、拙著「日本人にとって自然とはなにか」「農本主義のすすめ」「愛国心と愛郷心」の引用を参照のこと。

宇根豊(2019)『日本人にとって自然とはなにか』ちくまプリマー新書。

- 宇根豊(2016)『農本主義のすすめ』ちくま新書。
宇根豊(2015)『愛国心と愛郷心』農山漁村文化協会。
宇根豊(2014)『農本主義が未来を耕す』現代書館。
宇根豊(2011)『百姓学宣言』農山漁村文化協会。
宇根豊(2007)『天地有情の農学』コモンズ。

【参考にした本】

- 松田喜一(1951)『農魂と農法・農魂の巻』日本農友会出版部。
溝口雄三(2011)『中国思想のエッセンスI 異と同のあいだ』岩波書店。
相良亨(1995)『「おのずから」としての自然(相良亨著作集第6巻)』ペリかん社。
橘孝三郎(1932)『日本愛国革新本義』建設社。
立川武蔵(1995)『日本仏教の思想』講談社現代新書。
東畑精一(1931)『日本農業の展開過程』岩波書店。
柳父章(1982)『翻訳語成立事情』岩波新書。